

# Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: School Bus in 2008 - New York)

## 《1ヶ月限定ニューヨーク学生生活》

もう今だから話せますが、大学の卒業式が終わって1週間後にアルバイトで貯めた貯金から飛行機のチケット代などを差し引いて両替した3500ドル分の現金とトラベラーズ・チェックを持ってニューヨークに旅立ち、結局そのまま丸4年間ニューヨークで生活していましたが、最初の1ヶ月だけはまじめに英語学校に通いました。でも、その後はいわゆる不法滞在…。

というのも、確信犯というか「ひと旗上げるまでは絶対に帰国するまい！ いや、一生アメリカで暮らすぞ！」と心に決めていたので、普通に観光ビザで入国して居続けても良かったのだが、変に律儀な所があったのか、ちゃんと5年間の学生ビザを取って入国した。その学生ビザを申請するのに現地の学校の証明が必要だった為に、マンハッタンのど真ん中辺りにあって授業料が一番安い英語学校を選んで、(確か)最低期間だった1ヶ月分の授業料を納めて学生ビザを取得した。

ニューヨークに行くのは学校に通うことが目的でなく、また、学校に通い続けるようなお金などなく、まずは現地でウッドベースを手に入れて、残りのお金で働く場所が見つかるまで何とか生活をしなければならなかったと思っていましたので、最初から学生生活は1ヶ月限定とわかっての入国だった。勿論、入国の際にそんなことを口走らうものなら即刻強制退国命令が下ってしまうので、入国の際にはいたってまじめな学生を賣いて無事にJFK空港の入国審査を潜り抜けた。

だが、この入国審査の後にひとつ面倒なことがあった…。「ニューヨークでお世話になる人に渡さない」と母親が荷物の詰まったダンボール箱に押し込んだ市販の漬物(厳密にいうと、20cmくらいの細長いたくあんが2~3本黄色い漬汁に浸って真空パックされたもの)が荷物検査でひっかかったのだ。X線に写った映像にはたくあんから怪しげな根っこやヒゲみたいなものが出ていて、「新種のドラッグ」とでも思ったのか、白人の検査員の男が陰しい表情を浮かべて早足で自分の元近づいて来て、無言でダンボール箱をひっかき回してその漬物を探し始めたのだ。そして、黄色い漬汁に浸った漬物をつまみ上げて「What is this?」と強い口調で問い直し始めた。

そんな時に限って「pickles(漬物)」という単語も吹っ飛んで、ちょっぴりあたふたしながら「ヤバイ! 説明できないと捕まる!!」と思って咄嗟に出た英語が「This is vesitable! (これは野菜です!)」。しかも「v」の発音がちゃんと通じたのか微妙な雰囲気…。一瞬、変な間が空いてからもう1人アジア系の女性の検査員がやって来て、白人の検査員の男からたくあんの漬物を受け取って頭の上でかざして見たり、裏のラベルを見つめたり、ムギムギと中身のたくあんを触り始めた…。じっと黙って見つめているのも怪しいと思いついて「This is food! (これは食べ物です!)」と応戦。再び変な間が空いてから、2人の検査員が何かブツブツと語り始めた。だが、その直後に散乱した荷物の上にたくあんの漬物を放って所定の位置に戻って行った…。結局、食べ物であることを納得したみたいだったが、ダンボール箱に目一杯ぎっしりと詰め込んでいた荷物がひっくり返されて辺り一面に散乱してしまっていた。「"Sorry" ぐらい言えよ!」とムカッとしたが、ここで余計な事を口走ったりふて腐れた態度をとって自分の夢が潰えてしまったのは元も子もないと思いついて、黙って荷物をダンボール箱に押し込んで出口に向かった。

まあ、そんなことも今では良い思い出だが、1ヶ月限定の学生生活が事のほか楽しかった! 学校の名前は「Rennett Bilingual (レナート・バイリンガル)」。場所はミッドタウンのEast 45th St. のビルに入っていた学校で少人数制が売りの学校だった。1クラスは先生1人に生徒4~5人で、英語の能力別に4クラスほどに分かれていた。別にまじめに通わなくても良かったのだが、現地で友達ができるかもしれないと思って初日からまじめに顔を出した。日本人の姿も結構見受けられ、その他アジア系の生徒やヨーロッパ系の生徒も多かった。狭い待合室でやや緊張しながら待っていると、一人ずつ先生らしき人に呼ばれて、各部屋に連れて行かれた。どうやらクラス分けを決める即興の英語テストが行われるようで、暫くすると自分も部屋に連れて行かれた。

あとから分かったことだが、当時の校長先生だった白人のおばあちゃんが自分のテスト担当だった。質問の内容は忘れてしまったが、「どこから来た」とか「何で英語を学びたいのか」とか、それほど大した質問ではなかったのは覚えている。一応、日本で受験勉強を経験していたので少なくとも中学生レベルの英語は問題ないと思っていたので、それほど悪い出来ではないだろうなあ…なんて思っていたのだが、クラス分けの結果一番英語ができない生徒が集まるクラスに決定! 「何だよ、あばあちゃん」とも思ったが、別に英語の勉強に来たわけではないので軽く受け流した。でも、案の定「This is a pen.」的な英会話から学ぶ羽目に…。

でも、1ヶ月休まずに通ったおかげでたくさんの異国の友達ができ、パーティーやら夜毎飲み歩くなど楽しい日々を送った。また、そんな楽しい日々を送ったものだから所持金がどんどんと減り、最初にウッドベースは手に入れていたから良いものの、1ヶ月後の学校終了の時点で所持金が100ドルを切っていた。でも、タイミング&運良くウェーターの仕事が決まり、何とか生きながらえました。